岐阜経済大学論集 31 巻 1 号（1997 年）

〔研究ノート〕

18 世紀のアメリカの都市

小　澤　治　郎

まえがき

本稿は 18 世紀後半期独立革命前後の時期のアメリカの都市を扱う。1775 年のアメリカの都市は最大のニューヨーク，フィラデルフィアで 2 万人台，次いでボストン，チャールストン，ニューポートが 1 万人台で，それ以外は 1 万人に達していなかった。当時は都市人口が全人口中の 5 パーセントという非都市社会であり，都市といっても近代都市とは大いに違っていた。外観からも現在の感覚からすれば農村と変らず，上水道，下水道はなく，井戸や屋外便所の時代であった。しばしば伝染病が流行し，火災も防火体制がなかったことから大火災となり，現在の開発途上国の小都市並みであったといえよう。もっともイギリスの政府関係者や役人たち，大地主，大商人，奴隷所有者たちの生活は当時のイギリスの上・中流階層のそれをもちこんだもので，ある意味でこのヨーロッパ文化がキリスト教とともにアメリカ社会の進む方向となるのであるが，大多数の農民たち，そして当時工業生産が皆無であったことから不可欠の存在であった職人たちはいわば原始的状況に近い環境のなかで生活していた。もっとも材木，魚，鳥獣類などを容易に入手することができ，とくに土地が無限に近く存在したことは，すでに将来の経済的飛躍を予想させるものであった。

このような状況下で，独立革命は決定的な意味をもった。これまでイギリ

ス国王の臣下であり，年季奉公人などの身分に縛られていた人々が，徐々にではあるが近代人として認められていくのである。経済的影響は早急には現われないが，文化的，社会的変化は劇的で，世紀の転換期から1830～40年代にかけて大きく様変りした。このような変化の先頭を切ったのは，社会全体のなかでは小さな割合を占めていた都市であった。本格的な発展は19世紀に入ってからであったが，すでに18世紀後半期にアメリカの都市社会はいくつかの面で近代化の様相を呈し始め，将来の工業化の舞台となる準備を始めていた。

本稿は 1. R. M. ロバートソンと C. M. ウォルトンの研究によって経済を，2. J. T. メインの研究によって当時の社会構成を，3. H. P. チュダコフと J. E. スミスの研究によって当時の都市の発展を，4. リチャード D. ブラウンの研究によって，マサチューセッツ州における都市化の普及を見ることにする。

1.

まず17世紀から18世紀にかけてのアメリカの植民地の経済を Ross M. Robertson & Carry M. Walton, *History of American Economy.* 1979. Chap.4. によって見る。以下の記述は筆者による要約である。

18世紀末にアメリカ人の約90パーセントはその生計の主力を農業に頼っていた。家庭で生産する主要食糧品に加えて，多くの家族はかなりの猟鳥，獣，魚を食べていた。無限の土地が利用できたアメリカ植民地で食糧を輸入する必要はなかった。農民たちは原生林の開墾を始めとする多くの困難を克服しなければならなかった。交通費が高価であったことから市場へ運びだすことができたのは高額商品だけであった。植民地は工業的製品など多くの輸入品を必要としたが，その代価を支払ったのは南部および中部の植民地が産みだした“商業的”穀物であり，ニューイングランドの海運業であった。

南部植民地

生産総価格の面から見て，植民地時代から19世紀にかけて南部の農産物は主要な位置を占め続けた。南部植民地は当時の肥沃な土地が示すことができる相対的有利さの良い例であった。そこでは初期にタバコ，続いて米および藍，そして独立革命後は木綿という主要生産物が大量生産された。それらは当時工業化しつつあった各地で生れた需要にそれなりの品質と安価さで応えることができたのであった。それらはイギリスの生産物とは競合せず，同時にフランスやスペインの産物に対抗できたものに限られた。ぶどう酒，絹，麻などはこれらの条件を充たすことができず，漸次姿を消していった。

タバコは16世紀にヨーロッパで増えた需要に応えて，粗末な道具しか必要としなかったこと，数年で土地を枯渇させたが，アメリカ南部には利用できる余分の土地が豊富にあったことから，スペイン産の良質のタバコには安価さで対抗して増え続けた。価格が変動し，しばしば極端な低価格になったため，生産調整などの方策が試みられたが，多くの奴隷を使い，イギリスの資金を利用できた大農場だけが生き残っていった。17世紀末からヴァージニアやサウスカロライナで米の栽培が始まった。良質の米を作るためには規則的な灌漑が必要であり，沼地や河の流域に奴隷労働を使って米の栽培が拡がり，18世紀末にはサヴァンナの南からノースカロライナに達した。藍の栽培は18世紀中葉に始まり，それが米と違って高地の乾燥地で栽培できたこと，米栽培で奴隷が忙しい時期と藍の加工の時期が違っていたことなどのため，それは米を補う作物として採用され，農場主の収入を増加させた。このほか，南部全体を通じて乾草，動物製品，小麦，各種果物，野菜が栽培され，農家の自給体制を助けた。カロライナやヴァージニアのように成牛，牛肉を輸出した地域もあった。

中部植民地

ポトマック河とハドソン河の間の地域の土地は肥沃で食糧生産に適していた。17世紀がすすむにつれて，この地域の西の部分と東の部分では農業の方法が違ってきた。西の方では従来通り開墾が中心で，木を枯死させ，開墾したばかりの土地で収穫を上げる努力がなされた。東の方では，ニューヨーク州のオランダ人，ペンシルヴァニア州ではドイツ人がヨーロッパの農法をもちこみ，ようやく人口が増え始めたニューヨーク，フィラデルフィア，ボルチモアの都市人口のための食糧生産が始まった。小麦が最も重要な作物であり，トウモロコシ，ライ麦，カラス麦，大麦がそれに続いた。17世紀後半にはかなりの小麦，小麦粉が西インド諸島へ輸出された。その他，果物，野菜（とくにジャガイモ）の栽培，家畜の飼育が行われた。そしてこの見返りに工業的製品が輸入された。この地域の家族による農業経営が，のちの西部の農業の原型になった。補助労働力としては，最初の出費が小さかったことから，奴隷よりも年季奉公人が好まれた。

ニューイングランド

ニューイングランドの経済は必ずしも農業だけに限られなかった。農民のなかにも他の職業を兼業するものが多かった。土地が肥沃でなかったこともあって，トウモロコシが最も多く栽培された。自家用に他の穀物や野菜も栽培され，牛や羊も飼われたが，革命直前にはこの地域は食糧や繊維を輸入する地域になっていた。ニューイングランドではタウンが政治の単位であっただけではなく，農業経営の単位でもあった。中世イギリスの農村を見習ったタウンは，中心の集落の近くに農地や庭園や果樹園があり，共有の墓地があり，しばしば共有の荒地や畠も存在した。18世紀に入ってイギリスの囲い込みと似た土地の統合整理が行われるが，これは農業の効率を高め，片や，農民たちは余分の土地をもてるようになり，全体にイギリスの囲い込みとは

かなり性格が違うものとなった。

抽出産業

当時のアメリカ人は農業のほかに間接的に土地や海などの自然から生計の糧を得た。森からは毛皮や野獣の皮革，木材，それを通じて船舶の材料が得られ，海からは魚や鯨が獲れた。地下からは鉱産物が少量ながら抽出され，これらは農業に次ぐ価値を産出した。

1）毛皮取引

植民地は初期の最も良質の毛皮がなくなったあとの二級品の毛皮を産み続け，農民たちは副業としてジャコウネズミやアライグマの毛皮から現金収入を得た。北部ではオールバニやフィラデルフィアが主要取引所で，ビーバー，ミンク，狐などの毛皮がヨーロッパへ輸出され，南部ではチャールストン，オーガスタで鹿皮が取引された。実際の狩猟はほとんどインディアンによってなされ，かれらと良い関係をもつことに成功したフランス人が長く主導権を握ったが，1763年のパリ条約以降イギリス系植民地人が主導権を握ることになった。

2）森の産物

木は植民地人の燃料であり，建築資材であった。開拓民は木を倒し，それで家，納屋を建て，家具を作り，垣を作った。木を燃やした灰からポッタースや真珠灰が得られ，これらはガラスや石ケンの生産に使用された。北部や中部植民地の川沿いに小さな材木工場が生れた。川の水流を動力と輸送手段として利用し，近隣の森から切り出した木から板やおけ板を作りだした。なかには造船や船の修理専門の製材所が現われ，松やカシの木が良質の船材とされた。松は当時の造船に必要であった松やにの原料でもあった。完成した船やこれらの船舶必需品は植民地で販売されただけでなく，イギリスへも輸出され，造船関係の専門職人も数多く生れた。

3) 海 産 物

主として北部植民地に限られたが，魚と鯨の捕獲は植民地初期から重要な経済活動であった。ロング・アイランドからニューファウンドランドにかけての海岸沿いに多くの港が生れ，その周囲に製材所と造船所が生れ，だんだん海岸から離れた深い海の魚が獲れるようになった。鱈は国内で消費されるとともにヨーロッパ，西インド諸島へ輸出された。鯨はその油が照明に利用されたほか，潤滑油，香水の原料となり，その骨はコルセットの原料として高価な商品になった。その漁場は16世紀はニューイングランド沖に限られたが，18世紀には遠くまで拡がり，18世紀末には大小300隻の捕鯨船がマサチューセッツ諸港から出漁した。

4) 鉄 製 品

鉄は当時経済的に重要性をもった唯一の鉱産物であった。鉄鉱石を掘り出して銑鉄に仕上げるまでは描出産業に属し，それ以降は工業生産に属すると考えられるが，製造の方法は中世末期のそれを超えるものではなかった。18世紀に入って熔鉱炉は大型になり，内陸部が開かれるにつれて沼地鉱石よりも岩鉱石が使われ，ふいごにも水力が利用されるようになった。木炭の豊富さもあずかって植民地産鉄はイギリス産鉄と互角の産出量に達した。革命直前にはその産出量は年間3万トン，世界全体の産出量の1/7に達した。しかし植民地は原料鉄の輸出地にとどまり，最終鉄製品はほとんどすべてイギリスから輸入した。

製 造 工 業

当時の産業（industry）は原材料が抽出される分野と最終製品が加工される分野が重なっている場合が多い。また企業（firms）も家庭内生産（households），職人的工場（craft shop）から製造所（mills），作業所（yards）まで多様であった。当時の条件を考えると土地はひじょうに豊富であり，資本と労働力が不足していた。資本の量はのちの時代ほど大きな意味はもたなかったが，労働力の

不足は大きな意味をもち，とくに熟練職人は重要な存在であったから，労働力不足からくる賃金の高騰は相当なもので，植民地の賃金水準はしばしばイギリス本国のそれの2倍になった。ほとんどの人々が農業と土地の値上りに希望を託し，都市に住む人々は少なく，圧倒的多数を占めた農家の家庭内工業生産が大きな割合を占めた。そして一般農民が家庭内で生産できるよりも品質の良い，ある程度技術を必要とする工業的生産を担当した職人が大きな意味をもった。まだ未熟ではあったが，各種の大きさの製造所や作業所が，国内向けおよび輸出向けの商品の生産を増やし始めていた。

家庭内生産

家庭内生産で最も重要であったのは食料品と衣料であった。肉は冬の初めに保存食にされるかビン詰めにされた。皮や獣脂はぜいたく品であった。小麦，ライ麦，トウモロコシは田舎の製粉所で製粉しなければならなかった。主婦たちは週に一回パンを焼いた。砂糖，糖蜜，カエデシロップを使ったゼリーやジャムも主婦たちが作った。ビール，ラム，ウィスキーも一般家庭でしばしば見られた。衣類作りは原料の繊維の準備から最後の縫合までの各工程が家庭内で女，子供によって担当された。でき上った衣服は粗末なものであったが，実用的であった。それらは北部および西部の羊毛と麻の交織，羊毛と木綿を材料としたジーンズ，南部の綿と麻で織ったファスチャン織などであった。高級な服地はイギリスから輸入されたが，これを着ている人々は少なかった。初期のアメリカ人たちは釘や家庭用道具から，家具類まで自分で作った。農夫たちは自分で家を建て，精巧な大工仕事や石工の仕事だけを職人たちに頼った。

職人工場

職人たちは都会にも田舎にも見られたが，家事労働と職人労働の区別はそれほどはっきりしてはいなかった。労働力不足のため，多くの職種をこなす

よろず屋的職人もいたし，関連した職種をこなす職人――例えば皮なめし工が靴製造をするなど――が多かった。一般に大都市を除いてはヨーロッパのような同業者組合は存在せず，職人たちは特定の地域に固定されることは少なかった。大都市では各種の技術者が見られ，例えば1697年のフィラデルフィアでは51もの手工業者と建築業者が存在した。

工場，作業場

植民地時代の工場とは“動物，風，水の力を利用した機械”であった。それは原料的材木や棒状の鍛鉄や銑鉄を作りだした。（あとの加工は職人たちが担当した。）ときには最終製品を作りだした工場もあった。18世紀の中ごろまで工場は未発達な状況にあった。最初は小川の水力だけを利用していたが，徐々に小規模のダムや運河が作られるようになり，機械も大きくなっていった。鉄はまだ部分的にしか使われず，ヒッコリーなどの硬い木材でできた機械が多かった。力の伝達方法も未発達であったので，一つの機械ごとに水車が設置されていた。革命直前に力の伝達方式に改良がなされ，デラウェア河やチェサピーク湾沿いの工場は新型になった。1770年頃から一日100ブッシェルを製粉できる機械が現われ，1782年のオリヴァー・エヴァンスの製粉機は，わずか6人の労働者で一年に10万ブッシェルを製粉できた。北部および南部ではなめし皮工場，ペンシルヴァニアや北部では紙工場が現われ，繊維工業では機織や最終工程の分野だけが機械化された。ウィスキーなど蒸溜酒やビールの醸造所も工場と呼ばれ，製粉工場とともに製材所も工場と呼ばれた。

造 船 業

植民地の工業はいずれも小規模なものであったが，造船業だけはかなりの規模に達した。すでに1631年にボストンで30トンのスループ（一本マスト）船が建造された。17世紀中に，ボストンとニューポートを中心に，ニュー

イングランドの海岸のあらゆる所に造船所が生れ，ニューヨークやフィラデルフィアもこれに負けなかった。18世紀前半期に植民地造船業は最盛期を迎えたが，アメリカ植民地の商人の船と，イギリスを中心とする諸外国の船が建造された。1775年のイギリス商船の約1/3はアメリカで造られており，1700年に，ニューイングランドの漁船を除く船が2000隻を超えた。小型船が多かったが，一級品の木材を利用できたことがその最大の理由で，重商主義時代のイギリスの船の需要の重要な部分をアメリカ植民地の造船業が担当したのであった。錨，ロープ，帆布などの工業的製品はイギリスから輸入し，完成した船には木材を積んでイギリスかヨーロッパの港に送り，そこで船と積荷を一緒に売却する方法でアメリカ産の船が大西洋を渡った。そして片や，多くの造船職人がアメリカへ渡ることになった。

海運業

ニューイングランドや中部植民地の商船隊はイギリスやオランダの商船隊に劣らない地位に達した。これはアメリカの産業のなかでも独立革命のころには，タバコ輸出に次ぐ地位を占めることになった。

2.

次いでアメリカ植民地の社会構造を Jackson Turner Main, *The Social Structure of Revolutionary America.* 1965. Chap.III, Income and Property で見る。これも筆者の要約である。

革命期のアメリカ人が所有した財産は0から数千ポンドまで多様であり，どの階層に集中しているとは言い難く，階段状というよりは傾斜状の，連続的な平坦な姿を示していた。

最も底辺に位置するのは奴隷および年季奉公人であり，かれらの年収は，12〜15ポンドから33〜36ポンドの間であり，その資産は50ポンド以下で，

土地を所有する者はほとんどいなかった。かれらは都市と農村で傭われ人として肉体労働に従事し，独身で健康な者でしかも幸運であった者は若干の財産を蓄えて小農民に出世した。水夫たちはその上の層を形成したが，仕事が連続せず，収入が途切れることが多く，その年収は奴隷や年季奉公人とあまり違わず，財産を所有する者は少なかった。その上に位置した職人，職工たちは上記の三者の2倍から3倍の収入を得た。かれらは大工，職工，仕立屋，石工，鍛冶屋などで，年収は30～60ポンドで，ほとんどが自分の家をもっていた。もっとも仕立屋，大工，靴屋のなかには収入が低くて家をもてない者もおり，とくに景気が悪くて仕事がないときには，惨めな状況に陥った。その上にはかなり資本を必要とする職業――蒸溜酒製造業者，製革業者，ロープ製造業者，金細工師，砂糖精製業者がおり，300ポンドほどの資産をもち，なかには2000ポンドを超える資産をもつ者もいた。このように当時の中産階層の間の格差は大きかったが，平均して100ポンドの年収と200ポンドの資産をもち，下層の肉体労働者とは違う生活をしていた。船長や農場経営者の下層もこれに属し，宿屋の経営者，酒や食料品の商店主は，比較的上の層に属した。南部では10人程度の奴隷所有者がこの層に属した。教員の給料は低い方に属し，地域差があったが，ニューイングランドでさえ，小学校教員は月40～50シリングで，一般労働者並みであった。中学校の教師は年収40ポンドまたは100ドル（当時の1ポンドは2.5～3.5ドル），ボストンでは200ドルを得た者もいたが，南部の場合は20ポンドという場合もあった。アカデミーと呼ばれた私立学校はより高く，大学教師も100～150ポンドであった。総じて，教師たちの生活水準は職人たちと比べても低く，100ポンド前後の資産しかもたない者が多く，一般に教職は定職というよりは臨時的職業と見なされた。

牧師の収入は教師より高かった。北東部の大都市では100ポンドを超える者が多く，また冠婚葬祭の場合に得る副収入があった。南部の牧師はさらに高収入で，教会付属耕地を貸与される者もおり，300～400ポンドの収入を

得た者もいた。

医者の収入も牧師のそれ以上に多様であったが，牧師のそれと大体同じレベルであった。かれらは現金では診察料を徴収し難い，場合によっては1/3程度しか集金できないという弱点をもっていた。年収700ポンド，200エーカーの土地をもつ都市の富裕者層に属する者から，土地も奴隷ももたず，数十ポンドの資産しかない者まで多様であった。最上部の約5パーセントが富裕者層に属し，下は中産階層底部の者もいた。大体において牧師，小店主，富裕な農民のレベルであった。

弁護士は数が少なく，職業人のなかでは最も収入が高かった。かれらのなかには医者や牧師の10倍もの収入がある者がおり，富裕な大商人や奴隷所有者に次ぐ地位を占めた。下の方では年収200ポンドといった者もいたが，大体が300～400ポンド台，数年間では1000ポンドを超え，なかには3000～4000ポンドに達する者もいて，全体的に弁護士は富裕者層に属した。

政府の役人も上から下まで多様であった。州知事の年収数千ポンド，市長の600～700ポンドが上位で，高位の判事，収入役，セクレタリーらは年収200～400ポンドで中位を占め，下位は書記の100～250ポンド，保安官の200～300ポンドであった。しかしかれらは，宿舎や食費で有利になることが多く，全体として弁護士よりは低かったが，その他の職業人よりは上位にあった。

農家は自給自足体制であったことから現金収入は少なかった。食糧，薪，家具，そして家自体もほとんど自給する生活の方法であり，外部へ売り出す生産物の量は少なかったので，資産価値にたいする収益の比率は小さく，全体的に4パーセント以内であった。ニューイングランドの農家はとくに自給自足的であり，余剰生産物は少なかった。ニューハンプシャーのある農家の資産は1754年に6389ポンドと評価されたが，総収益は151ポンドで，純収益は22ポンドだけであった。その結果，収益率は3パーセントであった。その他2パーセントにも達しない農家も多かった。中部植民地の農家は

ニューイングランドのそれほどではなかったが，それでも年平均5ポンド以下の収入であった。南部諸州の農家収入はかなり多かった。プランターなどの大農家が多かったことがその背景で，煙草を栽培している農家の平均収入は7〜9ポンド，それにトウモロコシ，木材，船舶必需品からの副収入が加わった。総じて地域的平均収入はニューイングランドで約16ポンド，中部植民地で24ポンド，ノースカロライナ以外の南部で約50ポンドと推定される。農民の資産も大体同様の傾向を示した。マサチューセッツ州では所有する土地の平均は約100ポンド，農民のほとんどは50〜200ポンドの土地をもっていた。サフォーク郡とウースター郡の全資産平均は425ポンドで，マサチューセッツ州の農民は職人の2倍の資産をもち，専門的職業人と同じ程度の資産をもっていた。ニュージャージー州の農民の土地資産はマサチューセッツより多く，160ポンドであり，南部のそれの平均はより大きかった。以上総合して農民たちは50ポンドから500ポンドの資産をもち，その全資産は300〜500ポンドであった。

大農民はより大きな収入と資産をもった。農民の12人のうちの1人は1000ポンド，20〜30人のうちの1人は2000ポンドを超える資産をもち，なかには1万ポンドを超える者もいた。かれらは年に600〜800ポンド，なかには1000〜2000ポンドの収入を挙げる者もいた。奴隷は1人一年当り10〜20ポンドの収益を挙げるとされたから，20人の奴隷を抱えた農民は年に200ポンド以上の収入があった。もっともこれらの数字には必ずしも必要経費が計算されていないが，とにかく大農民たちは大商人に匹敵する収入を得ていた。

以上総合して，最下位の肉体労働者は収入は最も少なく，資産もほとんどもたなかった。その次の職人たちは若干ましな収入を得て，少しの財産をもっていた。農民たちの多くもこのレベルであった。農民のなかには少数の富裕者もいた。専門的職業の人々や商店経営者たちはかなりの収入と資産をもっていた。そして大商人たちは明白に豊かで，暮し向きが良かった。

要約すると，(1) 白人人口の 1/5 を占める最下層は農村と都会の肉体労働者，下層の職人，下層の農民たちであり，かれらはほとんど土地をもたず，資産もほとんどもたなかった。(2) 小さな資産をもった中産階層は白人人口の半分を占め，その大多数は職人と農民であり，その他教師などの職業人，小店経営者たちであった。(3) かなり資産をもった中流上層は大きな土地をもつ農民，ほとんどの専門的職業職の人々と商店経営者たちであった。(4) 上流階層は大商人，弁護士，大土地所有者たちであった。

3.

ハワード P. チュダコフの研究 Howard P. Chudacoff, Judith E. Smith, *The Evolution of Urban Society.* 1975. pp.1–15. によって植民地時代の都市の発達を概観しよう。

ヨーロッパ人の到着以前から北アメリカにはインディアンたちの都市があった。ミシシッピ河流域のカホキィアは 3 万 5000 の人口をもっていたとされ，五大湖地方のヒューロンは 4000〜6000 の人口をもったとされた。ヨーロッパ人が進出してきて，これらのインディアンの都市のいくつかを自らの通商，軍事的防衛，政治，宗教などの目的を果すために受け継いだ。スペイン人はフロリダ，ニュー・メキシコの地域にセント・オーガスチン（1565 年），サンタフェ（1610 年）などを作り，インディアンたちと協力したり，衝突したりしながら，スペイン本国の制度をもちこもうとした。さらにサンアントニオ（1718 年），サンジェゴ（1769 年），サンフランシスコ（1776 年），ロサンゼルス（1781 年），サンタ・バーバラ（1782 年）が作られていった。フランス人は植民というよりは個人的商人として登場したが，かれらも交易中心地を必要とした。かれらは水路沿いにケベック，モントリオール，デトロイト，セントルイスを作り，18 世紀初めには五大湖地方からミシシッピ河にかけての地域に拡がり，1718 年にニューオーリンズを作った。七年戦争後

ニューオーリンズはスペインの支配下に入るが，西漸運動，ミシシッピ河通商の発展とともに大都市に成長していった。オランダ人は，西インド会社の下に，1625年にニューアムステルダムを開き，良港という自然条件を利用して，奴隷の多い，オランダ型の都市を作り始めた。

イギリス人のボストンは1630年頃から宗教的色彩の濃い商業都市として，また周囲の農業地域の中心地として発展し始めた。1639年にはニューポート，1680年にチャールズタウン，1682年にはフィラデルフィアが設立され，大西洋岸の諸港が漁業，商業の中心地として成長し始めた。その後ボストン，ニューポート，ニューヨーク（1664年にイギリスのものとなる）フィラデルフィア，チャールストンが大きな港として，それに続く中規模の港としてプロビデンス，オールバニ，ニューヘブン，ボルチモア，ウィリアムズバーグ，ノーフォーク，サヴァンナが育ってきた。それらはいずれもロンドンやアムステルダムなどヨーロッパの都市を見ならったものであり，ヨーロッパとの連絡の場所であり，ヨーロッパ文明が流入してくる場所であった。そしてそれらは同時に植民地の商業と政治の中心地となり，文化の中心地としても急成長することになった。その人口の成長は右表の如くであった。

	1690年	1742年	1775年
ボストン	7,000	16,382	16,000
フィラデルフィア	4,000	13,000	24,000
ニューヨーク	3,900	11,000	25,000
ニューポート	2,600	6,200	11,000
チャールストン	1,100	6,800	12,000

イギリス本国政府はこれらの都市を植民地統制の拠点として利用できたので，これらの都市の人口増大を歓迎した。これらの都市は，本国の重商主義政策の網の目のなかで，穀物，米，魚，毛皮，木材などイギリスが必要とする商品を輸出し，アメリカ植民地人が消費する製品類の輸入の経路となった。しかし一方これらの都市の成長はそのうちに植民地経済の成長を背景に植民地統制を掘りくずし，重商主義的植民地組織そのものを脅かす側面をもち始めるのであった。植民地都市の発達につれて植民地商人が成長し，かれらは輸入商品を扱うとともに

内陸部の定住地の商業を扱うようになった。かれらは小さいながらに商業的勢力となり，ちょうどイギリス本国が植民地から原料商品を吸い取り，小規模ながら存在した銀の通商を枯渇させたのと同じように，農村地域から農産物と貨幣を吸い上げるようになった。以上の情勢が比較的に順調に展開した北部と違って，南部は商工業が発達しなかった。船の航行可能な河が多かったことから大港湾都市はそれほど必要ではなく，主要作物に頼る農業は北部のように多様な農作物を生まなかったので自給自足的傾向が強く，奴隷や年季奉公人が多かった南部の労働者は北部の農民のように商業的交換に参加しなかった。

政治的自治の傾向も伸長してきた。元来植民地の都市は国王あるいは地方政府の特許状によって設立を許可され，その特許状は地域の行政の形と範囲を規定していた。しかし都市が成長するにつれて，特許状の改訂などによってイギリスの都市のように，王の特許の下で市長や市議会が市政を行う方向に向った。市政の実権は商人と職人が握るようになり，役職はかれらに独占された。政治の内容もイギリスの都市と同じように封建的な色彩が濃く，熟練クラフトへの参入の規制，重量や寸法などの基準の決定やその地域で作られる商品の価格や品質の決定を行った。市の歳入のほとんどは市場や売店の許可料や賃貸料でまかなわれた。ニューイングランドのボストンやニューポートではこれもイギリス農村のタウン・ミーティングに似た制度が清教徒の組合教会から生れた。一年に数回，タウンの全成年男子が集り，役員を選び，法律を定め，課税額を定め，諸問題の結論を出した。そして会議が開かれていない時期はセレクトマンと呼ばれた行政委員が政治を行った。それはほとんど市場と教会の有力者に独占され，全体として市の最も豊かで認められた人々を貧しい，身分の低い人々が尊敬し，それに服従するという政治体制であった。同じ人々が選挙の度に選ばれ，政治的党派争いは危険と見なされ，当時の選挙では異なる政治的立場の人々が選ばれることを争う風景は見られなかった。選挙は現存する社会秩序を確認するための伝統的手段であっ

たのである。南部ではこの非近代的傾向はさらに甚だしく，国王に任命された議員たちがほとんどプランターたちによって占められていた。

18世紀初頭の植民地の都市はまだ都市の外観は具えていなかった。粗末な家の裏では牛が草を食べ，泥んこの道路を豚が歩いていた。港や波止場の道路沿いに違った階級，宗教，母国，職業の人々が一緒に群がり住んでいた。せいぜい一マイルほどの生活の範囲のなかに住んでいたから，ほとんどの人がお互いに顔見知りであった。紙幣は少なく，物々交換が多かった。家族や働き場所を越える社会組織は教会であった。新聞も劇場もその他の娯楽も一切なかった。書かれた，あるいは印刷された文書は少なく，口頭の会話が伝達手段であった。聖書に書かれていることが行動の基準であった。

以上のような古めかしい，牧歌的な雰囲気にも拘らず，都市問題の困難さはすでに現われていた。後の時期の都市を苦しめる諸問題はすでに見られ，即席の対処法が試みられ，ヨーロッパの都市の解決法も導入され，市民の集団的行動や政府による規制も始まっていた。都市は効果的な交通と通信を必要とする。その手段である道路の計画は，初期は周辺の個人に任され，狭い，曲りくねった道路も見られたが，18世紀に入ると政府の干渉が始まり，格子状の道路が普及していった。公費による木の切株や岩の除去，砂利や丸石による舗装，泥や水たまりをなくするための，中央の高い，傾斜した路面の形式，排水路の設置，橋の建設などが順次導入されていった。当時の道路は子供や動物の生活の場でもあり，馬や馬車の速度の規制も行われた。街路の清掃も，初期には周辺の個人の自由意志に任され，年に数日間各家から道路修理に人手を出すというイギリスの伝統に任されていたが，徐々に市当局が専門の労働者を傭うなどの方策がとられ始め，街路に屑や動物の死体を放置する従来の方法がボストンやニューヨークでは市の条例によって禁止され始めた。フィラデルフィアが1690年代から街灯を設置したのを先頭に市費による公的街灯が各都市に普及していった。当時の住宅のほとんどが木造であったことから火事は頻発していた。葦や藁ぶきの屋根の禁止やたき火の場

所の限定，深夜の火の使用の禁止などの規則は早くから見られたが，ボストンの場合，1653年の大火の後，各家庭にハシゴを備えることが義務づけられ，1676年の大火のあと消防自動車が導入され，1679年の大火のあと，市はいくつかの防火用の区域に分割され，徐々に近代型の防火体制ができ上っていった。警察組織は，全成年男子が交替で昼間の巡邏と夜間の夜警を勤めるというヨーロッパ方式が導入された。これは人に感謝されない，危険な仕事で，富裕な市民は代人を傭ったり，罰則金を払ったりしてこの仕事を逃げ，現実にはあまり経済的にめぐまれない人々の仕事になっていった。事態の改善が望まれたが，植民地人たちはイギリスの軍隊を宿営させた際，しばしば権力の濫用を経験したので，永久的な，専門的な警察を作ることに消極的であり，人口増加とともにその必要性が生れているにも拘らず，警察の設置はおくれた。公的衛生施設も原始的状態が続いた。病原菌説はまだ認められておらず，一般に汚水や腐敗物からでる臭い気体が病気の原因であると信じられていた。そして現実の対処法は豚による生ゴミの処理，河や池の清掃ぐらいで，公費による清掃人が部分的に導入され始めた。徐々に便所や墓についての規定，製革所や屠殺場などの場所的隔離が進んだ。伝染病が最も恐れられたが，海港であった大都市へは船員たちが海外からもちこんだ。天然痘や赤痢が一回の流行で数百人を殺すことがくり返され，18世紀に入って患者の隔離政策が始められ，18世紀後半期には予防接種が始まった。これらはかなり効果を発揮したが，黄熱病だけは流行し続けた。

時代が下ると貧困者問題が表面化してきた。元来寡婦，孤児，不具者，老人などが保護の対象であったが，相次ぐ重商主義戦争，不景気，インフレーションによって都市の貧困者の数が増え，季節的失業者，退役軍人，新移民，内陸部からの移民が新しい貧困者層を形成した。17世紀末から18世紀にかけて各都市の救貧対策費は増額され，1730年代にボストン，ニューヨーク，フィラデルフィアは救貧院を建設した。貧困者を減らすための移民を制限する試みもなされるが，これは長続きせず，労働者不足の時期を迎え

ると移民促進政策へ転換した。貧困者を救うことを目的とした私的団体が教会，富裕な個人，職人団体などによって作られ，かなりの成果を挙げた。しかし，公的，私的な援助にも拘らず，貧困者層の多くは最低の生活を抜けだすことはできなかった。

以上，農村とは違って，都会では個人的には解決できず，どうしても公的規制が必要になる健康，火災，水，交通の問題が，まだ揺籃期の植民地アメリカの都市でも現われ，その段階での可能な対処がなされたのであった。

4.

次いで，Richard D. Brown, The Emergence of Urban Society in Rural Massachusetts, 1760–1820. *Journal of American History,* LXI, 1974. pp. 29–51. を紹介したい。これは独立革命前後の時期に，ボストンを中心とするマサチューセッツ州の都市化にともなって，周辺の農村の人々の生活がどのように変っていったか，当時の制約内であれ伝統的生活様式からどのように近代化への変化を経験したかを扱ったものである。叙述はやはり筆者の判断による要約である。

植民地時代の都市社会はきわめて限られた現象であった。それは行政の中心である港町に限られ，独立前に新聞をもっていた都市は1ダースもなく，都市的社会生活を支えるだけの組織をもっていた都市はさらに少なかった。組織といえるものも教会と官庁だけであった。宗教的に分裂している地域もあったが，それ以上の文化の多元性はなかった。地方の政治は個人的色彩に強く影響され，当時の社会構造を反映する働きが目立った。地方の政治は一握りの個人の集団によって半ば寡頭政治的に行われていた。タウンの集会ができ上っている地域ではその関心は内部にばかり向い，近代的な都会性は稀薄であった。通信は限られた隣人間のみに限られ，都市社会が田舎に影響を与えたとすれば，それは専門的職業人，商人，政治家など少数のエリートた

ちの間だけに限られ，かれらだけがその社会的活動の一部として都市生活にたずさわり，職業上の必要から首都と関係をもっただけであった。

19世紀中ごろまでに，このような状況は一変した。1776年から1850年の間にアメリカの人口は9倍に増え，都市社会はもっと高い比率で増加した。1776年に5000人以上の人口をもつ都市は1ダースもなかったが，1850年にはそれは147を数え，増加率は12倍であった。都市はアメリカの北部，南部，東部，西部のあらゆるところで姿を現わした。それらは新聞，郵便局，教会，政治団体，図書館，専門的職業人の組織，ボランティヤーの組織などの都市的組織を具えていた。そして同じぐらい重要であったことに，田舎も都市の社会的，地理的基盤になり始めていた。近代的都市社会は，情報伝達，異質性（専門化），世界主義（反局地性），および選択の自由（規制されない生活）などの特色をもっているが，18世紀中ごろのマサチューセッツにはまだそのような特色は少ししか見られなかった。

17世紀段階に比べるとある程度の自由が許されるようになっていたが，当時の人々の生活を縛っていた家族，教会，タウンの組織はまだ強固なものであった。第一の家族の問題について見ると，1760年ごろ結婚相手を一応自分で選ぶことができるようにはなっていた。そして自分が住んでいるタウンから他所へ移住することもできるようになっていた。しかし現実には結婚相手を決める場合，またその他の生活の各段階で家族の果す役割には大きなものがあった。政治家も牧師も17世紀以来の習慣や考え方を捨ててはいなかった。経済面での家族の家族員にたいする制約は大きかった。生活に必要な技術の習得も，生計を立てるための資金も家族から提供されるのが普通であった。このように道徳的にも，経済的にも，法的にも，まだ家族関係が重視される体制であったから，家族組織のなかでの個人の行動はまだ自発的とはいえなかった。

宗教の面でも，18世紀中ごろには教会への出席は一応自由であり，かつての教会法や十分の一税による強制は姿を消しつつあった。第一次大覚醒運

動によって教会や信者の雰囲気も変りつつあった。しかし習慣や伝統の力は強く，教会へ出席しないことは決して社会的には認められなかった。教会への献金も半ば強制的な社会的義務であった。

タウンに住むことから生じる社会への参加の義務も18世紀中ごろになってもかなりきびしかった。ボストン市ではこれらの規制はかなりゆるやかになっていたし，西部へ新天地を求めて移住することも法的には自由であった。しかしそのタウンに住み続ける限り，かなりの伝統的な義務は避けられなかった。総じて，当時のマサチューセッツの農村社会は，一歩先んじて近代化しつつあるボストンに倣って徐々に規制がゆるやかになりつつあった。しかしまだ伝統的社会の習慣は根強く，ある研究者によれば，“統一と調和を愛する強制的な全体の同意”が社会を支配していた。異質性と世界主義（普遍性）を含んだボストンの複合的都市社会と違って，田舎の農村はいまだに家族，教会，タウンが同一の信仰と生活様式で結ばれた単一社会であり続けた。それを大きくゆるがしたのが独立革命であった。

革命の一つの直接の結果は選挙制度であった。従来すべての選挙は皆が知っている富裕な地方の名士が副業的に選ばれることであった。新しい州知事や州議会の議員や1788年以降の国会議員の選挙は匿名性と抽象的問題を選挙にもちこんだ。かつてのように地域の人を地域の問題のために選ぶのではなく，見知らぬ人を国家や広い地域の漠然とした利害のために選ぶことになった。新しい選挙は新しいコスモポリタニズム（普遍主義）を必要とした。そして1785年以降，従来の争いのない選挙に代って，投票者たちの意見が分裂することがわかってきた。若干の混乱を経験して，1790年代以降フェデラリスト派とリパブリカン派の対立が始まり，選挙の際の分裂が正しいと認められるようになってきた。タウン・ミーティングは同意を求める場所ではなく，意見を争わせる戦場になってきた。このような傾向は1810年までに定着し，政治的分割と競争が常態となった。このような傾向は都市で最も早く現われ，それが農村へ拡まった。革命期に都市社会の指導者の数が増え

た。各種の委員会や事務所が生れ，多くの中産階層の人々が公的活動に参加し始めた。軍隊の募集，政党活動，通信事業，安全対策，査察活動などが自由と正義といった抽象的な原理のもとに展開された。かつては家族，教会，タウンの組織で慣習的に処理されてきた問題が意識された個人の活動によって解決されることになり，この傾向はボストンから周辺の農村地域に拡がっていった。

もう一つの，革命前後の都市を中心とする社会の変化はボランタリー活動の展開であった。これもすでにボストンでは18世紀中ごろまでに慈善，防火，フリーメーソンその他の市民の組織ができていたのが増え，さらに農村部まで拡がったのであった。1760～1820年の間にマサチューセッツ州で1900を超えるボランタリーの組織が生れた。一年に約70の新しい組織が生れた。それらは職業的な，弁護士，医者，職工たちの組織から教育，文化，慈善，公共事業さらに銀行，保険，製造業などの利益追求型そして宗教，道徳関係など多様であり，政治，経済，文化，社会，宗教の各領域を覆うものであったが，共通して従来の地域的性格を捨て，コスモポリタン的方向を目指し，新しい多様性を社会にもちこんだ。そして従来の市民組織がしばしば少数のエリート集団に限られていたのにたいし，新しい組織は市民の各層――なかには黒人や水夫など社会の底辺の人々もいた――が参加できるものであった。たとえば図書館の場合，かつての5ドルという富裕者しか利用できなかった使用料が50セントに低下した。防火クラブも旧来のものに加え，庶民たちのものが多数誕生した。一般に地方主義，偏狭さは非難されるようになり，一般性，普遍性が優勢になった。当時生れたハーヴァード大学の母胎となった各種文化団体のなかに黒人の部が存在したのがその一例である。かくて人々は家族，教会，タウンという従来の組織に加えて見知らぬ人々と接触し始めた。それは選挙活動や図書館，節酒運動や宗教団体のような直接的なものから，州あるいは全国的組織に参加するような心理的なものまで多様であった。

この地域性からの脱却を助けたものに印刷と郵便の普及があった。字が読めたり，手紙を書いた人々はまだ少なかったが，文書は着実に普及していった。1760年にはマサチューセッツ州に9の印刷所があり，ボストンに集中していたが，1820年には120の印刷所がマサチューセッツ全体に散在していた。新聞も増えた。1760年にボストンだけに5紙が刊行されていたが，1820年にはマサチューセッツ州全体で53紙が発行されていた。口頭による意志や情報の伝達，個人対個人の交渉の方法はまだ続いていた。それに加わった新聞やそれを支える印刷の普及は地域を超えた情報の伝達をもたらした。また郵便制度の普及も地域を超えた情報の伝達をもたらした。革命前にこの地域に一つだけであった郵便局は，1820年にはマサチューセッツ全体で443を数えた。

1820年のマサチューセッツは外観的には18世紀中ごろと違ってはいなかった。外の田舎には森，果樹園，畠が連なり，家の建て方もそれほど以前と違っていなかった。主な公共建築物は相変らず教会であり，酒場は従来と同じく近所の人々が集る場所であった。工場はまだ小さく，鉄道などはなかった。ボストンでさえ，当時の人口4万3000人の規模ではまだ都市というよりは一つのタウンであった。にも拘らず1820年のボストンは半世紀前のボストンではなかった。大覚醒運動と独立運動はかつての文化的孤立を過去のものにしていた。革命は選挙運動を通じて政治機構を変えていた。地域を超える展望がもちこまれ，戦争前の“イギリス国王の臣下(subject)”とは違った“市民(citizen)”が登場した。政治への参加と市民的発言権をもった人物が新しい共和国の理想的タイプとなった。愛国心が地域的一体感にとって代った。これらの変化は1800年前後の政党の活躍によって制度化された。街頭，新聞，行進，お祭り，演説会による選挙運動によって，フェデラリスト派もジェファーソン派もともに新しい市民精神と地域をめぐる問題意識の普及に貢献した。当時の投票率が75パーセントに達したことは，この新しい時代への変化がマサチューセッツ中の社会，家庭に浸透したことを意味する。

同時に，このころから始まる第二次覚醒運動が宗教面から個人の生れ変りを助けた。日曜学校や伝道教会の形で集団行動が生れ，図書館活動や文学クラブ，慈善運動も個人の精神的，道徳的改良に役立つとされた。これらの活動は啓蒙的ロマンチシズムの傾向を生んだ。これまで耐え忍んできた火災などの災害が“神が下した罰”から“人間が克服できる害悪”へ変っていくことに代表されるような合理主義と宗教心とロマンチシズムの混り合った情熱的な社会活動が始まった。このような傾向は商業と人口の増加を背景としていた。ボストンの場合と同様に農村部でも人口が 2000～3000 人に増えた地域で協同活動の展開が見られた。これらの地域では 20 パーセントを超える人々が商人，弁護士，印刷業，製粉業，芸術家など農業以外の職業にたずさわり，これらの人々が都市文化を農村へもちこんだ。1780 年以降，革命の影響，選挙戦，情報の拡大，自己改良の考え方などが社会の変化を促した。まだ本格的な工業化が見られないこの段階で，普遍主義と社会生活の豊かさに支えられた未来に夢を託するロマンチックな風潮が支配的となった。都市的生活様式が人々の心を捕え始めた。かつてのアメリカを支える人間であったヨーマンの評価にもかげりが見られ始めた。田舎よりも都市の生活が上になり始めた。Hayseed とか Boor（ともに田舎者の意味）とかいった言葉が生れ始めた。かつての同質的な古い生活様式に代って，コスモポリタニズムと自発的な社会活動が幅を利かせ始めた。家族，教会，タウンの強制力は弱まり，むしろ補助的役割を果すようになった。新しい組織にたいする義務の方が，家族，教会，タウンにたいする配慮を上廻り始めたのであった。古い，地域的規制は時代錯誤的様相を呈し始めた。他の地域から情報が入り始めたので，他の地域にたいする恐怖心が薄くなり，むしろそれに対する関心と期待が増え始めた。これまで異常なことであり，数も少なかった都市や西部への移住が身近なこととなり，数も増え始めた。

以上のような農村社会の変化はマサチューセッツ州で最も早く見られた。しかし，独立革命，選挙制度の変化，通信の拡大，自己改良を目指す活動的

なイデオロギー，ボランタリー組織の登場，商業的発展や人口の増加などの現象は十三植民地の各地でそれぞれ違った形で現われた。そのなかでマサチューセッツのケースは北東部を代表するものであった。

むすび

以上四つの研究を通じて独立革命期のアメリカの都市を見たのであるが，当時の経済の要約と社会構成の要約である1.および2.の研究を見れば，当時の経済はまだ原始的状態に近く，当時の社会がかなり伝統的色彩が濃いことがわかる。アメリカ植民地がイギリス重商主義の下に作られた社会でイギリス国王の統治下にありながら，同じイギリス人が作った社会であったことから17世紀のイギリス革命の成果がこの植民地社会にも反映し，原始的な開拓のなかで植民地人に特有の平等主義，個人主義が生れている面があった。しかし，全体としてはまだ伝統的色彩が濃いといわざるをえない。次いで3.の研究によって，当時の都市がイギリス本国と植民地の結節点として成長していったこと，それが当時の植民地の近代化の先頭を切ったことがわかる。さらに4.の研究ではボストン市の社会の近代化が周辺の農村地域に拡がっていった経緯がわかる。

リチャード・ブラウンは17世紀から19世紀中葉までのアメリカの近代化を論じた研究[1)]のなかで，当時の伝統的社会から近代的社会への移り変りを次のように要約している[2)]。伝統社会の第一の特徴は安定性で，この社会では過去，現在，未来は基本的に同じであり，世代が変っても生活様式は変らない。この社会の人々は時間はより効果的に利用すべきものだとは考えておらず，万事に急ごうとしない。経済は変化せず，イノベーションはこの社会とは無縁である。口頭による伝達，人力および動物の力だけしかないから数百人，せいぜい数千人の社会しか生れない。政治は身分制と服従を根幹としており，権威は少数のエリートによって独占され，血統が重んじられ，家父

長制が家族と社会を支配する。このような社会では仕事も分化せず，仕事とレジャーの区別もはっきりしないし，世俗と宗教生活の間の区別もはっきりしない。逆に労働やレジャー，宗教，祭りにおいて家族と社会が混然と織りこまれ，近代社会のように人間，人間の移動，時間の使用が区分化される専門化はまだ見られない。この社会の人々の人生観は受容と諦観であり，精神的，物質的改良への野心や期待はない。独創的な成功よりは過去の方法のくり返しこそが理想であり，新しさは疑いの目で見られる。効果を上げることや時間の節約は評価されず，古い方法が尊重される。地域社会こそ知慧の宝庫であり，外部の世界は好奇心と不信の対象であり，簡単には受け入れられない。

これに対し，近代社会は旧世界の安定性にたいし，ダイナミズムが特徴である。変化は望ましく，技術の利用によって環境を操作することが望ましい。時間の経過は単なるくり返しではなく未来へ続く貴重な商品である。人生は死に逆らい，成功へ向う競争となる。技術的工夫による人間の能力の意識された拡大が主要な目標となる。文字による知識の蓄積と拡散が必要物となり，伝統的社会の地域性にたいしコスモポリタニズムが優勢になる。商業や通信の拡大が物理的，心理的経験を拡大する。政治的には理論的正統性，一般参加，官僚化などがその特色であるが，全体として合理主義化に要約することができる。ブラウンは以上のような伝統的社会から近代的社会への変化が，17世紀から18世紀へと進み，独立革命によって飛躍し，19世紀初頭から1830年代，そして世紀中葉期へ，それぞれの時期に特徴的な近代化の過程が進行するとする。

同じような理論がマーク・エグナル[3)]にも見られる。それはアメリカ北部，アメリカ南部，フランス領カナダの18世紀中葉から19世紀中葉までの経済発展を比較し，前者の時期にアメリカ北部は他の二者とほとんど同じ状況であったが，後者の時期には他の二者をはるかに引き離す段階まで発展したことを示し，その理由を宗教および知的活動を含む三者の歴史の比較に求めた

ものである。大きく見れば，アメリカ南部の奴隷制，フランス領カナダの領主制という伝統的社会が，アメリカ北部の独立革命などによる近代化に立ち後れたという見方である。

以上のようないわば社会の近代化だけでアメリカ都市の歴史は説明できないかも知れない。しかし，19世紀アメリカ工業都市の成立の説明の大きな分野をこれが占めることになるだろう。

〔注〕

1) Richard Brown, *Modernization, the Transformation of American Life, 1600–1865.* 1976.

2) *ibid.*, pp. 9–15.

3) Marc Egnal, Divergent Paths, *How Culture and Institutions Have Shaped North American Growth.* 1996.